

北進するコースを通った。このように2つのピークの出現は台風の経路に依存していることがわかる。ただし、最低気圧の起時はキティ台風の場合も最大偏差が起きた時間より2時間前となっている。さらに詳細な解析と検討が必要である。

### 8. まとめ

台風6号で生じた高潮について、主に東京湾内の潮位変化の特徴を述べてその成因を調べた。平滑した最大偏差は千葉で163 cm、東京で127 cmであった。東京では顕著な副振動によって、最低気圧を記録して1時間20分後に最大偏差が現れた。数値計算による再現計算の結果、これは高潮によって千葉周辺に集められた海水が、台風の通過後に自由波となって南西へ進行し、さらに羽田沖の水深分布により屈折が起きて東京に高い偏差をもたらしたものであることがわかった。このような状況は、過去の台風によっても生じており、東京湾の西を南西から北東へコースをとる台風では偏差は2つのピークをもつと推定される。

防災上重要だと思われるのは、台風が行きすぎて潮位が下がり始めても、東京では安心できないことである。上に述べたように台風のコースによってはもう一度潮位が上昇してくることが十分考えられる。水門等の操作に

はこのような点への配慮は重要だと思われる。

### 謝 辞

東京大学地震研究所都司嘉宣助教授には、計算結果の表示に関して中間プロダクトの段階でプログラムを使用させて頂きました。また、本論文に関して示唆に富む多くの御指摘頂きました。お礼申し上げます。斎藤実前海洋課長（現在、東京航空地方気象台長）および磯崎一郎前海上気象課長（現在、気象協会）にも有益なコメントを頂きました。併せてお礼申し上げます。

### 文 献

- 淵 秀隆, 1961: 東京湾の過去の高潮について, 東京湾計画に対する高潮数値計算とこれの対策, 産業計画会議, 88-137.  
 気象庁予報部, 1985: 災害時気象速報, 昭和60年6月18日から7月14日にかけての梅雨前線による大雨と台風第6号による暴風雨等, 71 pp.  
 Miyazaki, M., T. Ueno and S. Unoki, 1961: Theoretical investigations of typhoon surges along the Japanese coast, (I), *Oceanogr. Mag.*, **13**(1), 51-75.  
 宇野木早苗, 磯崎一郎, 大塚 伸, 1964: 東京湾における高潮の推算, 第2港湾建設局, 30-32.

## 日本気象学会誌 気象集誌

### 第II輯 第64巻 第2号 1986年4月

- 林 良一: 集合一時間平均予報可能性の統計的解釈  
 岩嶋樹也・山元龍三郎: 時間一空間スペクトル大気大循環モデル. I. 周期外力を有する低次順圧方程式系の時間一空間スペクトルモデル  
 向川 均・廣田 勇: 順圧大気における強制ロスビー波の非線型的な振舞い.  
 第1部 強制ロスビー波の安定性  
 向川 均・廣田 勇: 順圧大気における強制ロスビー波の非線型的な振舞い.  
 第2部 初期値問題  
 K. HAMILTON: 成層圏半年周期振動の力学  
 岩嶋俊樹・住 明正: 冬期循環の予報 (JMA, 北半球モ

- デル) に対する Envelope Orography のインパクト  
 村松照男: 台風8019の眼のトロコイダル運動  
 山元龍三郎・岩嶋樹也・サンガ N.K.・星合 誠: 気候ジャンプの解析  
 安田延寿・近藤純正・佐藤 威: V字谷で観測された谷筋を流下する冷気流  
 岩坂泰信: 冬の南極成層圏エアロゾル層にみられる大きな偏光解消度: 南極昭和基地 (69°00'S, 39°35'E) におけるライダー観測  
 P. SINGH, T.S. VERMA and N.C. VARSHNEYA: 雷雲の動きが雲の微物理過程におよぼす影響